

## 追悼の言葉

～あの日をつなぐ私たちの使命～

74年前の今日、1945年8月6日午前8時15分、ここ広島に原子爆弾が投下されました。広島女学院でも、生徒・教職員合わせて少なくとも350名以上の方々が犠牲になりました。たった一発の爆弾で、女学院の中だけでも、これほどの方々が亡くなったのです。

あの時、女学院では朝の礼拝が終わり、退場の途中だったそうです。たくさんの方々が破戒された建物の下敷きになりました。動員先で被爆した方々もたくさんおられました。亡くなる瞬間まで賛美歌を歌っていた方々もいらっしやったそうです。きっと、どの場所にいた先輩方も、神様に平和を求めて祈りを捧げていたことなのでしょう。原爆はそんな願いをぶち壊しました。

私は今回を機に、改めて『夏雲』の、生徒・教職員、両親の手記を読みました。自分の目の前で死んでいく友達、いつものように「いってきます」と言って出て行ったきり帰ってこなかった娘、自分を置いて逝ってしまった親。亡くなった方々には、それぞれの家族がいて、大切な人との日常があって、いなくてはならない理由がありました。それぞれの手記からは、そんな日常が一瞬にして破壊されたことがはっきりと記されています。また、本来なら生き残ったことは喜ぶべきことなのに、それをも素直に喜べない現実はとても悲しく、生き残った方々には一生忘れられない心の傷となったのだらうと、いたましく思いました。

私たちは、被爆者の生の声を聞ける最後の世代だと言われています。私たちは、女学院での平和教育や講演などを通して、そんな貴重な声を聞いてきました。多くの被爆者の方々がおっしゃっていたのは、「今の日常をありがたく思い、皆さんが平和な世の中にしていくくださいね」という言葉でした。私は、そういった言葉から、二つのことを考えます。

まず、私たちの毎日は、平穏に過ぎていくものだけど、それは当たり前ではなく、人々の努力によって築かれてきたものだということです。『夏雲』を読み、人々は原爆が落とされるまで、戦争の中にあっても幸せを見つけて懸命に生きていたのだと強く思いました。そんな日常をいとも簡単に原子爆弾は奪ってしまいました。戦争や原爆は、人々がどのように過ごしてきたかなどお構いなしに、日々をめちゃくちゃにするものです。それはとても恐ろしいことだと思います。

次に考えたのは、「平和」であるとはどういうことなのだろうか、ということです。辞書には、平和とは“戦争や紛争がなく、世の中が穏やかな状態にあること、”と書かれています。でも果たして、この言葉どおり、戦争や紛争がないこと＝「平和」なのでしょうか。

日本では、武器などを使って人を殺したり戦ったりしているわけではありません。そういう意味では辞書上にある“穏やかな状態、”に当てはまるかもしれません。でも私は、「日本が平和なのか」といわれたら、少しためらってしまいます。憲法第九条改正や、北朝鮮からのミサイル、沖縄のアメリカ米軍基地などの政治関連の問題、貧富の差の問題など、人々が穏やかに暮らせる状態ではないさまざまな問題が、今もたくさんあります。物理的に戦いを

しなければ「平和」と言っているのだろうか、「平和」とはそんな単純な言葉で表せるものだろうかと思うのです。

確かに今の日本は、一見「平和」であると言えるかもしれませんが。しかし、そんな今だからこそ私たちは、目先のことばかりを見るのではなく、自分で物事を考える力を持ち、一つ一つの問題について真剣に向き合うことが大切だと思いました。

今なお戦闘状態にある国や民族も少なくありません。私たちの国には戦闘がなくても、戦いがなくならない場所があることを心に留め、問題視する必要があると思います。

たくさん犠牲の上で、私たちは生きています。私たちの毎朝の礼拝は、74年前のあの女学院で、先輩方が悲しみの中、本当の平和を願って毎日行われていた祈りと、繋がっています。先日、女学院での講演で、佐藤優さんが私たちに送ってくださったメッセージの中に、「学ぶことは生きることに繋がる」という言葉がありました。この世代に生まれ、この女学院で日々を過ごしていく私たちにとって、平和を学び追い求めていくこと、深く考え発信することは使命なのだと思い、心に刻んで、日々を過ごしていきたいと思っています。

2019年8月6日

在校生代表